

スタール夫人と世論

Mme de Staël and public opinion

武田 千夏¹

¹大妻女子大学比較文化学部

Chinatsu Takeda¹

¹ Faculty of Comparative Culture, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：スタール夫人，世論，自由主義，サロン，ジェンダー

Key words : Mme de Staël, Public opinion, Liberalism, Salon, Gender

抄録

スイスのローザンヌ大学のピアンカマリア・フォンタナ女史は、スタール夫人は政治思想家として、父親のジャック・ネッケルの世論の考え方をそのまま踏襲したと主張した。本報告では、両者の相違を重視する。スタール夫人はフランスの近世から発達したサロンの伝統を踏襲して、女性を世論の中心に添えた点で、財務大臣の立場を反映した父親の世論とは大きく異なる。

スタール夫人 (Anne-Louise-Germaine Necker, Baronness de Staël-Holstein) はフランス革命期を代表する女流作家である。1766年5月にパリで生まれたが、生粋のフランス人であったわけではない。父親は、フランス革命期の財務大臣として有名な、スイスのジュネーブ出身のジャック・ネッケルだった。母親のスーザン・ネッケルも同じくスイスのローザンヌ出身だった。両親はともに中産階級出身で、カルヴァン主義を信奉していた。ネッケルは一代で財を築くほどの手腕を持つ銀行家だった。彼の性質の潔癖さについての噂を聞きつけたフランス王国は、ネッケルを財務長官に任命するにいたった。妻のスーザンもプロテスタントの神父だった父より当時の女性としては例外的な教育を受け、ラテン語、ギリシャ語なども操った。彼女は夫のキャリアを支えるためにパリでサロンを開いて著名人を招待し、スタール夫人の両親は啓蒙主義たけなわのパリで、特権階級から注目される存在だった。

ネッケル家の一人娘として生まれたジェルメヌは、小さいころから母親のサロンに出入りしていた。当時の一流の男性知識人と直に会話をかわすことによって、彼女は学校に行かなくとも、多岐にわたる知識を身につけることができた。スタール夫人は同じようにプロテスタントの在パリのスウェーデン大使の要職にあったスタール氏

(Erik de Staël-Holstein) と1786年に政略結婚をし、ヨーロッパの貴族階級の仲間入りを果たした。結婚後は大使夫人として母親から独立して、自分のサロンを開いた。

フランス革命が勃発した年、スタール夫人は23歳だった。それから30年以上もの間、彼女は卓越した会話の技巧を駆使して革命期の最も代表的なサロンの女主として知られることとなった。またスタール夫人は同時に17冊に及ぶ著作を出版した結果、国際的に有名な女流作家としても知られることとなった。彼女は幅広いテーマを網羅し、小説、戯曲、道徳、政治エッセー、文学批評、歴史、伝記、翻訳論、詩などについて著した。

近年英米圏の自由主義の伝統とは異なるフランス自由主義への関心が高まるにつれて、2017年にはスタール夫人の政治思想を扱った重要な単著が2冊出版された。(ピアンカマリア・フォンタナ, 工藤庸子) フォンタナはスタール夫人の世論の概念に新たな分析を加えた。フォンタナは、スタール夫人の世論の考え方は父親のネッケルの世論の考えをそのまま踏襲したもの考えるが、スタール夫人がその旧体制の考え方を革命フランスの状況に適用させたことに注目して、そこからスタール夫人が導き出した世論についてのオリジナルな考察を導き出した。第一に、フォンタナによれば、スタール夫人は国民と政治指導者の間に確

かに存在する感情的、道徳的紐帯を世論とみなしたという。アメリカの歴史家で世論についての研究が著名なロバート・ダーントンはこの考え方に賛同する。そして、ダーントン自身はそれを『国民の道徳的水準が低ければそれに呼応した政治的リーダーが選出される』と解釈し、フォンタナの解釈したスタール夫人の世論というプリズムを通して、アメリカでトランプ大統領が選出されたことを嘆いた。確かにフランス革命期の総統政府の時代、国民感情はパワーゲームに終始した政治リーダーたちに対する感情的絆を失っていったのは事実だとしても、ダーントンの「上から目線」的世論の解釈がスタール夫人の世論の考え方に一致するかについては、議論の余地があるように思われる。この一例が示す通り、フォンタナはスタール夫人研究を、現代政治を理解するための鏡と捉えている。そのためには都合の悪い条件については沈黙を保っている。ネッケルとスタール夫人は世論が18世紀の社交界で誕生した、という点を強調するが、後にドイツの哲学者、ハーバーマスも指摘したこの重要な史実については、フォンタナはあえて沈黙を貫き通した。

最後にフォンタナはジェンダーの視点をも恣意的に排除した。スタール夫人を一標準的な政治思想家として尊重するからこそ、この18世紀啓蒙主義が生み出した例外的な女流作家を他の男性の政治思想家と同じ並びで捉えたいという意図が感じられる。しかしスタール夫人の政治思想のユニークさを理解するためには、どうしても彼女のジェンダーについて論じないわけにはいかないように思われる。さらにそのような視点からスタール夫人の世論を理解すると、それは現代社会の世論とは異なる、18世紀に固有の世論のイメージが浮かび上がってくるのである。

私は、スタール夫人が世論にサロンの女主人としてのあり方を投影したと考える。フランスにおいてサロンが始まったのは17世紀の宗教戦争の最中であった。フランスで最初にサロンを開いたのはランブイエ夫人だったとされる。その頃から、サロンとは個人の邸宅の応接間、談話室を意味したが、それは同時に個人の私的な邸宅を舞台とした小さな私的社交界でもあった。上流階級の女性たちは自宅に文化人、学者、作家らを招いて、知的な会話を楽しんだ。サロンを開いた女性たちには社会的使命があった。それはただ会話を楽しむだけではなく、サロンの文化活動、つまり文学や

上品な会話によって、男性の好戦的で自己中心的な態度を変容させ、礼節を身につけさせることによって、社会全体を平和に導く、というものだった。

17世紀に始まったサロンは18世紀半ばの啓蒙主義のたけなわにピークを迎えた。文学的才覚を身につけた上流階級の女性がリードするサロンは、平和で、優しく、社交的で、啓蒙化された近代文明、つまりフランス王政の象徴とすら考えられた。自らもサロンに足繁く通ったモンテスキューは、サロンを訪れる男性たちは自己主張が強く、対立してしまうが、サロンのホステスたちは彼らの意見を、世論という名の道義的コンセンサスにまとめあげる、という役割を担っていたと指摘している。啓蒙主義時代に生を受け、文字通りサロンを通じて会話の技巧、礼節について学び、成長したスタール夫人は、この旧体制のサロン文化を革命期へと踏襲した。

スタール夫人の世論の考え方には、フォンタナが主張するように、確かに父親の影響が読み取れる。ネッケルは当時の社会、経済的エリート集団であった大土地所有者層が世論の発信者であると主張したが、彼女は父親の考えを踏襲して、社会秩序を保つためには、世論の中核がこの社会階層にあると強調した。また特権階級を中核に据えた世論はパリの社交界から発信される、という点でも両者は一致した。

しかしながら、そのほかの点では両者には考え方の隔たりが読み取れる。特に、スタール夫人は世論を非合理的、矛盾する考えの寄せ集めである、と暗に考えていた点は注目すべきポイントである。これは、ネッケルが世論を、幾何学的真実とも呼びうる統一的、明白な原理である、と定義づけたのとは大きく異なる。スタール夫人にとって世論とは直線というよりは曲線を描くものであり、その場限りのものですらある。ネッケルは財政難に苦しむ旧体制の財務大臣として、世論の基盤を大土地所有者層に求め、長期的信頼に足る国家財政のパートナーとして見立てていたため、上記のような世論のイメージが出来上がった。また旧体制の時代にネッケルが財務長官に任命された際には国内社会が比較的平和で安定していたことも、ネッケルの固定された世論のイメージに一役買った。

それとは対照的に、スタール夫人は有産階級の一市民として、世論とはサロンが自然拡張していったものである、と捉える。さらに世論の中核に

は女性が存在すると考え、自己主張の強い男性客人の会話をなんとか一つにまとめあげる、というサロンの女主の役割を世論の中核に据えた。

その結果、スタール夫人は革命で混乱した社会を安定化させ、自由と秩序の支配する近代社会を築いていくためには、女流作家が文学を通じて広く、会話の技巧、礼節などの優れた感性を市民社会に広めていかななくてはならない、と主張したのである。もちろんその中核にはネッケルの考え方を踏襲して、大土地所有層を重視して、社会の秩序を保つために彼らの政治勢力の維持も重視したが、同時に啓蒙主義のエリート主義から抜け出して、大衆政治、公共圏の拡大が実現したフランス革命の実情に合わせて、世論の新たな局面を導き出したのである。

スタール夫人の世論についてのイメージは非合理的、矛盾に満ちて、刹那的であることを指摘したが、それは未曾有の政治的危機、混乱の極みとなったフランス革命への前触れとも読み取れる。この点はネッケルとは大きく異なる点である。現代政治との関わりから言えば、インターネットの時代において、どうやって世論の道徳的水準を向上させていくのかという課題が、健全な民主主義の存続という問題と直結していくことに気づかされるだろう。

Abstract

Historians take for granted the view that Mme de Staël's opinion on public opinion followed that of her father, Jacques Necker. In this report, I place emphasis on the difference between them. I insist that following the salon tradition derived from early modern France, Mme de Staël placed women at the heart of her image of public opinion, so that it differs from her father's view of public opinion that reflects the position of the finance minister.

(受付日：2017年6月15日，受理日：2017年6月29日)

武田 千夏 (たけだ ちなつ)

現職：大妻女子大学比較文化学部教授

PhD. University of London

付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費 (S2826) の助成を受けたものです。

参考文献

- [1] Biancamaria Fontana, *Germaine de Staël: A Political Portrait*, Princeton University Press, 2016
- [2] 工藤庸子, 評伝 スタール夫人と近代ヨーロッパ フランス革命とナポレオン独裁を生き抜いた自由主義の母, 東京大学出版会, 2016年
- [3] Robert Darnton, "Mme de Staël and the Mystery of the Public Will. Germaine de Staël : A Political Portrait, Princeton University Press by Biancamaria Fontana," *The New York Review of Books*, June 23, 2016.
- [4] Chinatsu Takeda, "Apology of Liberty in *Lettres sur les ouvrages et le caractère de J.-J. Rousseau* : Mme de Staël's Contribution to the discourse on natural sociability" in *European Review of History*, 14-2, 2007, 165-193.